

光が丘公園バードサンクチュアリにおける生物多様性保全の取組みについて

公益財団法人東京都公園協会 松元 信乃

I. はじめに

都立光が丘公園は米軍住宅の跡地に造成された公園で、公園管理所北側にあるバードサンクチュアリは1983（昭和58）年に整備された。中島や州浜が配された池は0.6ヘクタールの面積を有し、水生生物種の導入により多様な生き物が生息し、さまざまな野鳥を見ることができる。整備当初は野鳥誘致を目的として閉鎖管理が続けられたが、度重なる開園要望を受け1987（昭和62）年に一般公開された。現在、バードサンクチュアリは土、日、祝日および月1回の平日開園を行っており、令和4年度は年間129日間開園した。一方で、バードサンクチュアリに併設する観賞池は、光が丘公園を代表するフォトスポットとして来園者の憩いの場である。コンクリートで覆われた都会風な造りでありながらバードサンクチュアリ池と同様に観賞池にも大小さまざまな野鳥の飛来があり、多様性に富んだ生物相を有している。なお、バードサンクチュアリ及び観賞池の運営及び維持管理はNPO法人生態工房が当協会の委託を受けて行っている。本稿では、令和4年度における光が丘公園の二つの池を中心に行われた生物多様性保全の取組みについて報告する。



図1. バードサンクチュアリ及び観賞池の位置図

Ⅱ. バードサンクチュアリの運営

1. 来園者数の動態

(1) 観察舎

バードサンクチュアリは、開園日にはスタッフが2名以上常駐し、生き物についての解説を行うほか、来園者数のカウント、鳥類相の把握、施設の清掃等を行っている。通常の開園時間は9:00～16:30である。決められた時間に通常1日2回開催される‘スタッフトーク’では、専門知識を有するスタッフがその季節ごとの旬の鳥をテーマに、写真や図を用いながら生態等の情報を解説する。こどもに人気の‘いきもの調べ’では生き物のスケッチを通して、観察スキルを磨く学びの場をこどもたちに提供している。

これらの取組みが奏功し、観察舎の来場者数は増加傾向にある。年度別来場者数の推移をみると近年では令和3年度が最も多く、年間5万人を超えている。月別では11月の来場者が最も多く、次いで5月が多い。反対に、7月・8月・12月に訪れる人は比較的少ない。(図2)

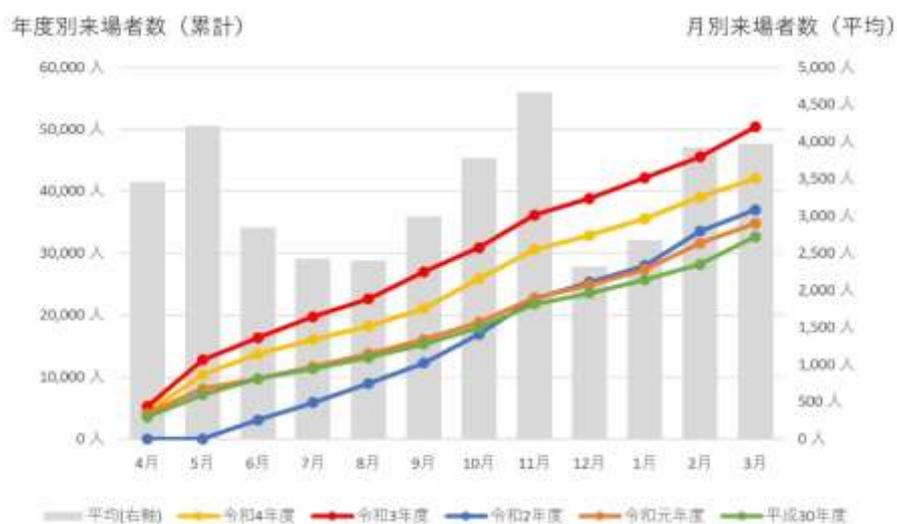


図2. 来場者数の推移



図3. 観察舎の前景と来園者の様子 (1月平日に撮影)



図4. 鳥の解説と『いきもの調べ』で作成された生き物のスケッチ

(2) 夜開園

日中が高温になる夏季には、開園時間を16:00～21:00にずらす夜開園が行われる。夜開園の期間中は、夜間活動が活発になる生き物をテーマに特別なプログラムを企画する。令和4年度は、特別解説「街のコウモリ」で身近に生息しているもののなかなか目を向ける機会のないコウモリを、夜の観察会「樹液に集まる虫」で夜の公園の知られざる昆虫たちの暮らしを紹介した。合計5回の夜開園において動員した来場者数は1,700人を超えた。



図5. 夜の観察会の様子

2. 混雑への対応

(1) 展示教材等の充実

観察舎では来園者数の増加傾向が続いており、感染症対策として三密をつくらない働きかけが運営スタッフには求められている。さらに、備え付けの望遠鏡が他の利用者によってふさがっていても、来園者が退屈しないよう観察舎内の展示教材を充実させるなどの工夫を続けている。なかでも観察舎の壁を飾る公募型写真展は、来園者自身が光が丘公園やその周辺で撮影した生き物の写真を展示している。作品のすばらしさもさることながら来

園者同士の交流のきっかけにもなっている。

さらに、今年度からは観察舎が閉園している日でも園内の生き物観察を楽しんでもらえるよう、配布用のセルフガイドリーフレットの作成を始めた。第一弾としてTwitterで配信して人気のあった「ヒキガエル」版が間もなく完成し、配布予定である。



図6. 光が丘公園名物ヒキガエルの大移動（公園公式 twitter 引用）

（2）夜開園の回数増加

夜開園に訪れる来園者は、通りすがりではなく夜開園を目当てに来園している方が多く、短い期間に複数回来園したり、友人に誘われて複数人で来園したりしている人が多いことが生態工房の調査で分かっている。来年度以降は今年度5回（前年度比1回）に増やした夜開園をさらに9回（前年度比4回）に増やし、実施期間も7月下旬から8月中旬までの期間から7月中旬から8月末までの期間に拡大する計画である。

Ⅲ. 植生管理および外来生物防除

1. 水域の植生管理

バードサンクチュアリ池では、さまざまな生き物に住処を提供するため、作業区域、実施時期・回数を決めて、底泥の除去（かいぼり）を実施し、水域内にさまざまな遷移段階を成立させている。今年度もヒメガマの茂みでカイツブリの繁殖が確認されるなど、良好な水辺植生が保たれている。



図7. かいぼり中のバードサンクチュアリ池と底泥除去の様子（1月）

2. 陸域の植生管理

バードサンクチュアリ内の草原では、在来植物で構成される草地環境および林床を維持するため、草刈り（草地で年2回、樹林で年1回）を実施している。在来草本の保全をめざし、外来植物の抜き取りも年2回おこなっている。これにより、草地では外来植物が減少し、在来植物を中心とした植生が成立してきた。これに加えて、今後は株数の少ない種の生育範囲を拡大できるよう実生木の除去やササ刈り等による日照改善を進める計画である。

3. 外来生物防除

(1) バードサンクチュアリ

バードサンクチュアリ池では過去4回のかいぼりを中心とした外来生物防除により、オクチバスやブルーギルなどの外来水生生物の根絶を達成してきた。現在はアメリカザリガニを対象にワナによる捕獲を実施しており、5年以内の根絶を目指している。今年度は4月から9月の6か月間、池全域に捕獲用ワナ100基を設置し、週一回の回収と再設置を繰り返した。捕獲した生物は種類ごとに個体数を記録し、在来種は池に放流し、外来種は駆除した。今年度のアメリカザリガニ捕獲数は7,154匹で、前年の9,617匹より微減した。来年度以降も引き続き駆除圧を高めて、アメリカザリガニの根絶を目指す。なお、外来カメについては例年並みの捕獲数となった。一方で、増加傾向にあるのが観賞魚の水槽掃除（藻取り）や釣り餌用として流通しているカワリヌマエビ属の外来エビ類である。小型生物の駆除には池の干し上げのほかには有効な駆除方法がないため、今後の動向に苦慮している。

また、ここ数年アライグマの出現を確認しており、今年度からセンサカメラによるモニタリングを開始した。その結果、4月から11月までの間に7回の出現を確認した。なお、センサカメラで確認した後、箱ワナを稼働状態にしたが、捕獲には至っていない。今のところ確認された個体の身体的特徴から、特定の個体1匹だけが繰り返し出現しているものとみられるが、来年度以降も状況を注視していく必要がある。



図8. 外来種捕獲数の推移



図9. 増加傾向にある外来エビ

(2) 観賞池

開園日以外は閉鎖しているバードサンクチュアリと異なり、24時間だれでも水面に接近できる観賞池ではペット由来とみられる生き物が継続的に捕獲されている。人工的な造形の観賞池は在来生物の生育場所として認知されにくいいため、飼えなくなったペットの住処と考えた来園者が捨てていくものとみられる。いうまでもなくペットを捨てる行為は動物愛護法で禁止された違法行為にあたるうえに、環境を攪乱する危険行為である。観賞池ではペットを捨てることの危険性を来園者に伝えるイベント「1日水族館」を定期的実施している。このイベントでは、捕獲された外来カメなどを展示し、それらが在来生物に及ぼす影響などを説明する。令和4年度も実施し、多くの来園者が水槽の前に足を止めた。

さらに、令和4年度は観賞池清掃を7年ぶりに実施した。作業には公園サービスセンターの職員を中心に、光が丘公園に出入りする業者にも声をかけ有志20名ほどが参加した。池の水位を通常よりも20cmほど下げ、池底に堆積した泥や枝葉をすくい上げ陸地に還元したり、プラスチックや釣り糸などのゴミを拾い集めたりするなどをして水質の改善を図った。同時に周辺に植えられている高木の切り戻しや低木の刈込、護岸の除草などを行い水辺の景観向上につなげた。



図10. 1日水族館



図11. 池掃除

IV. まとめ

都立公園の生物多様性に関する事業においては、生き物の生息地を守る「保全」と普及啓発・利用促進を含む資源の「活用」という目標がある。二つの目標は相反しているが、どちらも達成できてはじめて公園の魅力創出、利用者満足の向上につながる。光が丘公園バードサンクチュアリは、今日のように生物多様性の重要性が注目される以前から先駆的な取り組んできた好例といえる。

本稿を書くにあたり改めて観察舎に足を運んでみた。季節は冬、静かなバードサンクチュアリは空気が澄んで、見つめた先の笹藪や雑木が迫ってくるような緊張感がありバードウォッチングに熱中した。この魅力的な施設が今後も良好な環境で存続していくように公園管理者として関わっていきたいと思いを新たにした。